

## イメルダのハンカチ



お勤めをしていた頃の日曜日の夜は、大河ドラマを横目にしながら、ハンカチのアイロン掛けをするのが習わしだった。私のだけでも十枚はあったし、夫や子供たちのも加えて三十枚ほどもあっただろう。霧吹きで湿らせてしばらくなじませ、縫い目を擦らぬようピシッと引っ張ってアイロンを当てる。掛け終わると、きちんと十六分の一にたたんで、それぞれの持ち主別に重ねて行く。新品のようになったものを眺めるのは、気分がよかったものだ。

三年ほど前までは毎朝、ハンドバッグを開けると、中のあるものを洗濯籠に入れて、きちんとしたものを二枚づつ入れては、慌ただしく出掛けた。それが鹿児島に帰ってからは、買い物用のショルダー以外にはバッグを持って外出すること殆

どなくなった。ハンカチは上着やズボンのポケットに入れたままだったり、その時のバッグに入れっぱなしになったりしている。洗濯したのも、いつか纏めてアイロン掛けをすればよいと、取り込んだままのものを引出しに突っ込んで来た。

流石にこの頃は、アイロンを当てたものの在庫がなくなっている。年末でもあることだし、全部の整理をしようと、あれこれのバッグや、上着やコートのポケットから引っ張りだして洗濯をした。そして改めてハンカチの山に驚いていたことだった。

自分で買ったものは三分の一もない。殆どが頂き物である。女の人が職場を去るときに配っていったものが多い。嫁さんたちからのプレゼントもある。夫のそれは、殆どが甲問の引き出物なのだから、味気ないものが多いけれど、私のはそれぞれ個性がある。

アイロンを当てながら、自分の物を分類してみたい。一番上等は、縁が手がかりのものである。ディ

オール、イヴサンローラン、ジパンシー、セリーヌ、ヴァレンチノ、ニナリッチなどの大判十六枚、スワトウもある。これらは、お食事のときの膝におくためと、別格にして収納する。次が、手かがりもどきのもの。機械縫いだが、如何にも手かがり風にくけてある。レノーマの殆どとヴァレンチノ、セリーヌ、ジパンシーの一部などで、二十三枚。これらは外出時のお手拭き用にと真中の引出しに入れる。最後はガツシリとミシンが掛かっているものである。森花恵のものや無名のブランドもの、ノーブランドのものなど様々で二十八枚。それらは普段使いにと右の引出しへ色褪せた五六枚は、靴や窓拭き用にしよう。

こんなに沢山あっても、全てお馴染みのものばかりで、どれにも思い出があり懐かしいということは、職場での二十五年間の思い出が籠められていると言えるのだらう。

職場を定年退職したときに、あちこちから頂いたものが十数枚あった。これからは、もつそんなに必要ないと思って、気安くホイホイとこちら

の身近な人たちに差し上げてしまったが、考えてみるとどれも素晴らしい選択の柄で、相手の気持ちを考えて大事にしなくてはいけないかったのではと今にして思う。それにしても、まだ新品が何枚もあるし、タオルやガーゼの類を入れたら、百枚以上になるだらう。

引越しの時に、段ボール二箱の靴を捨てた。三男が、

ママ、イメルダのように沢山の靴だね」

と言ったことを思い出した。特におしゃれして高価な靴を買っていたわけではない。季節季節に買って履き潰してきたものの、捨てきれずにいたものがいつか山のようになってしまうていたのだ。戦歴の証とも言えた。

七十枚ほどのハンカチは、きちんと畳むとほんの僅かの高しかない。でもこの数を見たら、彼はきつとイメルダのハンカチみたいだ」と言うのではなからうか。

平成9年1月